



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2007 / 8 / 26(日)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 2

「第37回全国中学校バスケットボール大会」

<東海大四中健闘！ 惜しくも3位>

8月20日から3日間山形県において中体連の全国大会が開かれました。北海道からは男子東海大四中、函館湯川中、女子旭川緑ヶ丘中、札幌北栄中が出場し、いずれも予選リーグを突破し決勝トーナメントへ進出しました。3チームは残念ながらトーナメントの緒戦で敗退しましたが、東海大四中は大健闘し準々決勝で優勝候補の筆頭東京京北中とデッドヒートを演じ惜しくも2点差で決勝進出を逃しました。今回は北海道を破った東京都の指導者の先生たちが取り組むバスケットボールの中で東海大四中をどのように分析し、準備して戦ったかという観点から書いてみたいと思います。

執筆をお願いしたのは東京都中体連の梅津先生（府中4中）です。梅津先生は東京都の中学生オールスターを指導されるスタッフで、東京都の指導者の交流ぶりや、結束力を紹介して下さいました。私たち北海道の指導者にとっても参考になる事が多々あるかと思っています。

こんばんは。

東京の梅津です。わたくしも先生にメールしようと思っていたところでした。わたしは、校務その他の諸事情で、断腸の思いで昨日山形から帰京しました。そういうわけで予選リーグと決勝トーナメント1.2回戦のみの観戦でした。ご希望の京北対東海大四中の試合は、ピリオドごとに送られてくる仲間からのメール報告で一喜一憂していただいです。ですから、試合のことは、京北の田代君本人に対戦談を書いてくれるように頼んでおきました。近々送られてくると思いますので、もうしばらくお待ちください。

そこで、私が書けることは対戦に向けた京北の過程をお伝えしようと思います。

まずは、京北の監督兼コーチである田代直人先生ですが、まだ30代前半の若手コーチです

が、今大会以前にすでに全中に2回出場し、優勝と3位というすばらしい戦績をおさめた名コーチであり、わたしが次の東京都の指導者の旗印になってもらいたい、期待の後継者でもあります。わたしとは4回ほどオールスターのスタッフと一緒にやってもらいました。

私立中学であり、関東近県、特に埼玉の生徒や千葉のミニバスで優秀な人材を集めて強化したチームであるため設立当初の風当たりは当然強い学校でした。ほぼ同時期に東京成徳大学中学校の女子も中学校を強化し始めたので2大私立中学校として、そのやっかみや偏見、中傷は設立当初から多かったように記憶しています。

成徳の遠香（おか）先生も田代君と似たような年齢であり、また勝ち上がっていくペースも同じようであったので、よく比較されてしまったことも結果的に田代君のその後の人生にはラッキーだったのかも知れません。というのは、まず京北の田代君はどんなにチームが強くなっていても決しておごることなく、若手として謙虚な姿勢を崩さなかったことが一番大きいと思います。今から10年ほど前の関東大会が東京で開催され（関東は8年サイクルで開催地が輪番します）

彼が持った最初のころのチームが、全国決めで勝てる試合をベンチミスで落としました。若かった彼はこみあげる涙を拭きもせず、呆然としていましたが次の日の最終日、開催地の大会役員として悔しくて見たくなかったであろう目の前の準決勝、決勝の試合をサポートする側にまわって献身的に働いていました。そして、オールスタースタッフであった私も含めた多くの先輩先生の前で自ら正座して1時間ほど東京体育館の片隅で先輩達からのアドバイスと慰めを聞き入っていました。その日を境に、みんなの心の片隅のどこかに抱いていた私立中学の選手スカウティングに対するやっかみが京北中学校に対してだけ目をつぶれるようになっていった気がします。これはあくまでも私の私見ですが。

そういった人間的な魅力からか、彼には多くのサポートが結果的についてまわるようになりました。まず、過去2回の大会では森村先生（往年の京北高校の名監督）が常にベンチに入ってくれて、若い田代君をサポートしていました。

またここ近年はご自分の3人の息子が選手だということもあり、京北高校の現監督である田渡先生（長男は大学生、次男は現在京北高校のポイントガードとして活躍。今年のインターハイでは能代高校に敗れました。3男は中学2年生にして、今大会のキーパーソンでした。いずれの選手も京北中学校の中心選手として活躍してくれました）がベンチに入ってくれているのが大きいです。わたしもオールスターでつくづくそう思いましたが、有能なアシスタントコーチやよきアドバイザーがベンチにいることは大変心強いものです。船頭が2人になってしまわないように、この2人の年配者たちがうまく立ち振る舞って田代君を支えていたことが大きな要因であったと思います。

そういう背景で京北中は育ってきましたので、東京都の先生方からも多くの応援のもとに今大会を迎えました。そのなかでも一番大きかったのは、長年オールスターのスタッフとして関わってこられた近江先生（東京都下、小金井緑中）が、関東大会、全国大会とボランティアで京北中に随行し、選手のボディケアとメンタルケアをしたことが上げられます。京北中の武器は、圧倒的なシュート力とトランジションからの速攻です。ですから、連戦を乗り越えるにはどうしても選手の筋肉疲労をすばやく解消してあげることが重要になります。

近江先生は、体育教員であり専門は陸上の投てき競技ですが、赴任した学校でバスケの顧問を持たされたことが縁で抜けられなくなってしまったバスケット狂であり、私達のよき兄貴分であります。おん年50才をゆうに超えながらもわたしたちと気さくにお付き合いしていただき、他校の選手を自分の学校の選手のように怒ってくださる素敵な先生です。

近江先生は教員になられる以前、東京ヤクルトスワローズのトレーナーをなさっていた経験の持ち主でスポーツマッサージの大家です。そして、なによりよいコーチになるには審判もできなければだめだと思いついて48歳で日本協会公認をとられた奇々な方です。そういう方が長年田代君やわたしとオールスターのスタッフとして戦ってきた戦友なので、田代君もいち早く近江先生にお願いし、近江先生もこの依頼を快諾したことが大きかったとわたしは思っています。

初日を勝ち上がり、決勝トーナメントを控えた晩、近江先生の部屋でわたしは泊めていただいたのですが、ひとりひとり入れ替わり立ち代り選手がマッサージを受けに部屋を訪れ、激励や忠言をやさしく厳しく楽しく話しながら、気持ちよく選手を部屋に帰していた光景こそが、今大会の隠れた勝利の秘密であると私は考えています。1日2試合の長丁場をベストな状態で戦うにはこういったケアは必要不可欠です。こんな支えがあったことが隠れた逸話になるでしょうか。

さて、肝心の東海大四中をどう考え、どう攻略しようとしていたかということですが、正直申しまして今大会に関しての田代君のスタンスは一貫していました。強敵は福岡の姪浜、新潟本丸、山形六、東北学院、東海大四、これぐらいであろうと心得て大会に臨んだようです。ですが、彼の考えは、いつもなら神経質に、用意周到に相手の分析を怠らないのですが、今回はどんなにその話を振っても悪く言えばのんきに構えているのです。

それは、彼が「自分達のバスケットさえできるように心がければ、今年のチームは負けない」というゆるぎない信念があったと予選リーグ勝ち上がった夜に近江先生部屋で彼自身が告白してくれました。なかなか言える言葉ではありませんが今年の彼にはそんな自信と手ごたえがあったのだと思います。つまり、どんな相手がきても自分達の圧倒的なオフェンス力が発揮できれば負けないと考えていたようです。先にあげたチームは遠征やオールスターなどで1回は対戦したり見てきた既知のチームでした。ですからなんとなくのイメージは持っていたのでしょうか。

その象徴は、決勝トーナメントの2回戦あたりに伺えます。すでに先にとりのコートで試合を終え、とりのコートの試合がやっているにも関わらず、選手も田代君も早々とコートを去り、選手の体のケアに心を砕いているようでした。ある意味次の対戦校をなめているような感じにも取られそうですが、(そういう要素もなかったとは言えないと思いますが・・・)彼らには相手がどうこうよりも自分達のこと集中していたと思うのです。自分達のバスケットをやりきれば絶対に負けない・・・と。

わたしはそんな彼の心をこう考えます。

京北には梅丘というライバル校が東京にありました。新人戦決勝で109対104という、100点台を取りながらも敗れ、続く春季大会では同じく決勝で93対68で再び敗れます。そして、夏の選手権では109対91でついに梅丘を破りました。この勝利が京北中と田代君にとって大きな自信につながったと思っています。体格や能力において圧倒的に優位な梅丘に自分達のバスケットがついに勝てた。その自信と、関東大会での梅丘中のまさかの敗退。そして自身のチームの関東優勝でさらにその思いは強くなり、「強さ」とは何なのかということに彼なりの哲学をつかんだようです。その思いはいずれ送られてくる本人の文章に期待しましょう。

先ほど話した近江先生での部屋の話の中で、組み合わせ抽選の話になりました。「強い、嫌だと思っていた学校がみんな反対側にいってくれた」と田代君は喜んでいました。準決勝は、東北学院か東海大四だろうと・・・。ですが、予選において熊本の玉名に大差で負けたことで、東海大四の評価が下がっていたことも事実です。良いついて聞いていたのに・・・っていう感じでしょうか？だから、その日の夜の話の予想では準決勝は東北学院かなって

いうことでした。わたしも以前お話したように、オールスターでの平野君の活躍や幸丸先生の HP からの情報で東海大四は侮れないと思っていたのですが、残念ながら予選リーグや決勝トーナメントの東海大四の戦いぶりを不運にも見るができなかったので、2位通過という情報をいただいたときには熊本の玉名中要注意という情報が優先していました。

熊本の学校には、ついこの前まで全日本のキャプテンだったジャパンエナジーの大山妙子選手が東京の中野三中で全国制覇したときの監督であった伊藤敏幸先生という方が同じく熊本から龍田中という学校で参加されており、現在は副校長になられたとかでチームとどう関わっていらっしゃるのかわからなかったのですが（プログラムの監督名に名前があった）、こちらから電話してみたら、今回は副校長なので校長が引率して自分は留守番だと嘆いておられました。

しかし、熊本にはオールスターで一緒にやってきたスタッフが玉名にいるからよろしくねと電話でお話しておられました。熊本に移られてからも全国大会に何度も出場し、東京人にとっては名将の誉れ高い伊藤先生と一緒にスタッフをやっていた先生の学校・・・玉名は要注意だぞ、そんなことも重なって東海大四に関しては逆にほぼノーマークというより、真っ白な状態で試合に入ったのではないのでしょうか？聞くところによると案の上、平野君の大活躍で京北は大いに苦戦し、ラスト6秒で田渡3男坊のカットインで逆転勝利したとのことです。田代君は電話で、「東海も山形も本当にいいチームでした。うちも持てる力はすべて出し切りました。負けはしましたし、悔しくないといえようそになります。すがすがしい気持ちです。胸をはって東京に帰りたいと思います。」とっていました。

思うに東海大四も平野君を中心に持てる力をすべて出し切ったと思います。ただ勝利の女神はちょっとだけ京北に傾いてしまった・・・そんな感じではないのでしょうか？わたしにはそんな試合であったと想像できます。観戦していた東京の多く先生からお話を聞いてからまたメールします。

月末、長野へ行って鷺野さんや杉浦先生主催による第1回の全国指導者講習会に柴田君と参加してきます。たくさんのお土産話ができるように勉強してきます。それでは、また。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会